

グラビア研究会 第3回グラビア基礎講座に参加して

佐々木 洋介*

Yousuke SASAKI*

(一社)日本印刷学会グラビア研究会の第3回グラビア基礎講座は、平成29年5月31日(水)に日本印刷会館会議室にて開催された。「グラビア印刷、基礎からトラブル対処まで」をテーマに、トピックスを含めて5名の講師の方の講演があった。この第3回目の企画ではトピックスが盛り込まれ、「グラビア印刷の品質検査装置の原理から」の講演が加わった。今回も個々の講演時に質疑応答の時間を設定せずに、五つの講演の終了後に講師および委員を囲んだ質疑応答の時間が設定され、事前に質問票に書き込んで提出するといった質疑応答をスムーズに進行するための対応が図られていた。80名の募集に対して定員を大幅に超過して、お断りした人もいたが、立ち席でも構わないとの申込者を出来る限り受け入れたため、総勢150名の規模となった。机席に着席できない参加者が両サイドの通路に着席しているような盛況ぶりに驚いた(写真1)。



写真1 会場風景

冒頭、共催団体の田口理事長からご挨拶が有り、最近視察してきたヨーロッパの軟包装事情などを交えたお話があり、国柄の違いを痛感した(写真2)。

筆者は、グラビア研究会の企画に初めて参加した。以下に、参加した際の印象をま



写真2 開催の挨拶をする田口理事長

* 大日本印刷(株) 技術開発センター生産総合研究所パターンニング開発部 (〒300-2646 茨城県つくば市緑ヶ原1-1-3)

めた。

1. グラビア印刷時のフィルムの取り扱いに関する留意点 —フィルムの基礎から印刷・加工トラブル対処まで—

東洋紡(株) 松田 明氏

フィルムの製造方法とグラビア印刷におけるトラブルをフィルムの観点から説明された。フィルムの物性値からトラブルは想定できる。たとえば、OPPとPETを比較したときに、濡れ張力はOPPの方が低く、インキ密着性は悪い。要求仕様に合わせたフィルムを選定することは重要である。

フィルムの製造工程からトラブル対処まで学ぶことができ、大変興味深い内容であった。材料の特徴を理解し、日々の業務の課題解決に活かしていきたい。

2. グラビア印刷機の基礎

富士機械工業(株) 西村高博氏

グラビア印刷機の基本的な機械構成について説明された。グラビア印刷機の見当合わせ装置や張力制御装置は重要な制御項目であるが、特に張力を適正に保つことは印刷物の見当ズレやシワ等のトラブルを防ぐのに有効である。

グラビア印刷の基本的な概念は理解していたものの、機械の部位ごとに説明を受ける機会は少なかったため、非常に勉強になった。

3. グラビア製版の基礎

東洋FPP(株) 松崎徳治氏

グラビア製版における画像処理作業、製版方式について説明された。画像処理作業では、印刷工程で見当ズレが発生しても絵柄上で分からなくするオーバーラップ処理を行っている。製版方式は彫刻版と腐食版があり、彫刻版は豊かな階調表現が可能だが、文字の鮮明さに欠け、腐食版はその逆である。要求品質にあった版方式を選定することは重要なポイントである。

印刷工程に関する業務が多いため、今回製版工程に関する知見が得られ、理解を深めることができた。今後は、印刷物を多角的な視点から見られるようにしたい。

4. グラビア印刷のトラブルシューティング

東洋インキ(株) 安田秀樹氏

グラビア印刷におけるトラブルについてインキの観点

から説明された。グラビア印刷のトラブルは様々な要因が関連して発生する場合が多い。たとえば、ベタ部のはじきはインキ粘度が高い、インキの乾燥が速い等の原因があり、インキの粘度を下げる、インキに遅乾性溶剤を使用する等の対策をする。トラブルの発生要因を特定し、適切な処理をすることが重要なポイントである。

印刷トラブルを事例を交えて説明頂いたことで、理解しやすく、共感することができた。この知識を基に、業務では印刷トラブルをまずしっかり把握するところから始め、原因対策を図っていきたい。

5. グラビア印刷の品質検査装置の原理から

東京計器（株） 鶴澤正光氏

今回から追加された基礎講座であり、品質検査装置の検査仕様について概要を説明された。最新の検査装置は従来検査装置と比較して、輪郭部分の検出強化（検査閾値の適正化）、基準画像の取込みは更新方式から無更新方式で安定検査することが可能になった。

印刷の要求品質が高くなってきているため、検査装置の必要性は高いと感じた。今後も検査装置の最新動向は注目していきたい。

6. 各講師およびグラビア研究会委員との質疑応答

前回（第2回グラビア基礎講座）に引き続き、質疑応答は講演後に各演目に分かれ、グループディスカッション形式で行われた（写真3）。事前に質問票に書き込んで提出するといった質疑応答をスムーズに進行するための対応が図られていたこともあり、参加者の振り分けは問題なく進行した。質疑応答に参加した人は参加者人数に対してまだまだ少なく、参加者がより興味を持つ演目、コミュニケーションをとる環境作りは必要であると感じた。しかしながら、講演会等で講師の方に直接話ができる機会はなかなか無いため、とても良い試みであり、今後、普段の業務で抱えている課題等を持ち寄って相談できる場になると、より参加型の講座になると感じた。



写真3 質疑応答（印刷機）